
RPGヒロインという名のチート野郎。

菜智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPGヒロインという名のチート野郎。

【Nコード】

N5849Y

【作者名】

菜智

【あらすじ】

大人気RPGから飛び出してきたのは9割ツンの1割デレなチート過ぎるヒロイン。おまけに、飛び出てきた先には立派なチート。そのチートとチートヒロインがまさかの居候というベタな展開へ発展!?

主人公「…あー。頭いてえ。」

ヒロイン「風邪か？」

主人公

対処1・まず、自己紹介。んで、居候。

「神とのゲーム。それは気まぐれ？」

そのゲームは何処の会社の誰が作ったのかも分からない、まったくもって謎の多い人気RPGゲーム。

だが、その劇中に登場する主人公のヒロインが余りにもヲタクの心を鷲掴みにし、古い機種でありながら絶大なヲタク支持を受けている。

そのゲームを、例に漏れることなくしているのが俺、カミヤシユウ上南集である。だが、ゲームをしていると後ろから、自分しかない部屋の、自分の背後から。

『ほう。私はこうして動いているのか。中々、面白い。』

思いつ切り大人びた声ができるものだから、後ろを恐る恐る振り返ってみれば

『ん？どうした。私に構わずゲームを進めてくれ。私もこのように見るのは初めてでな。』

見た目そのまんま、今、俺がしているゲームの大人気ヒロインがいた。

「……………」

取り敢えず、後ろの<誰か>は無視してゲームを進めていく。が

『ほうほう。』

だとか

『このダンジョンはこうなっているのか……。いやはや、興味深い。』
とかずつと言われていれば気にならない筈はなく。俺は一回セーブをすると、メニュー画面にして再度後ろを向いた。<誰か>はいつの間にか我がもの顔で俺の後ろにあるベッドで寛いでいた。

『あ！何故止めた！？私は見たいと言うに……………。』

「ちよつと待て。」

見るからに、ザ・ファンタジーな服に寄ったシワを伸ばしているく
誰か>を見ていると

『全く……。どうしてこうシワが出来るのか……』

いや、普通ですから。それ。

『おい、お前。早くゲームを再開しろ。私は見たいんだ。』

この大人気RPGヒロインを支持しているヲタクからしたら、きつ
とこの性格は……。どうなのだろう。

「あの、さ。貴方は、誰ですか」

『私か？私はお前のしているゲームのヒロイン。名前は、ナツメ。』
俺は心の中で盛大に溜息を付く。もちろん、表には出さないが。

「で、そのゲームのヒロイン様が何故俺の、一プレイヤーである俺
の所にいるんですか？」

『さあ。それは私の預かり知る事柄ではない。』

いやいや、そんな事をどや顔で言われても。どうしろと？

『ここに出てきたのは、私自身の意思では無いからな。』

「じゃあ、誰の意思？」

『……………え、と。』

自称ヒロイン・ナツメは少ししょんぼりとしたような、少し言いつ
らいような顔をした。

『……………ゲームの、ボス。』

そんな顔を急に赤らめてぼそぼそと言われて、ときめかない男など
いないはずはなく。

「……はあ。」

だが、そんな現実からぶっ飛んだ事を受け入れる脳など生憎、俺に
は備わっていないかった。

『ごほん。……………とにかく、だ。これから暫くの間、ここで世話にな
る。』

「……………は？」

俺はナツメの言葉を聞き返した。今、なんて言った。

「あのさ。ゲームの中に戻ってくれますか？」

『無理だ。戻れる場所はゲームの何処かのダンジョンらしいからな』

「…つまり、そのダンジョンを見つけないと戻れないと？」

あー。頭痛い。遂に、自宅警備員丸三年の俺にも幻覚が……。

『と、いう訳で。これからよろしくお願いします。な？』

にっこりと笑うナツメの顔が若干怖く見えた。その笑顔の後ろに俺は武器を構える悪魔を見た。多分。

…これは、面倒見なきゃいけないんだろっなあ……。

これから起こるであろう様々な問題（大体は友達が関係するが）頭が回りそうだ。

…取り敢えず、俺はこのナツメとやらをゲームの中に戻す為にゲームを再開した。

……後ろを気にしないように。

対処2・チートは現実でもチートww

前回までの振り返り。

大人気RPGから飛び出して来たヒロイン様はかなりのツンが多いヒロインでした。おまけに、ちよつとの天然。

そんなツンツンデレ少女とチートヒロインチートヒロインの自宅警備員丸三年の居候物語。りっぱなチート

ナツメのちよつと機械じみた声にも慣れ、サクサクとまではいかないがそれなりにゲームを進めていた頃。

俺の胃が空腹の抗議の声を上げた。時間を見れば、大体3時ぐらい（暗くてそれ以上は見えない）だろう。

そろそろゲームへの集中力も切れてきたため、俺は冷蔵庫から晩ご飯の残りを取り出すと後ろで眠っているナツメを起こさないようにご飯を食べた。意外と減っていたのか、胃がもっとももっとと食べ物をもめてくる。

気づけば残り物はなくなっていたが胃はまだ足りないと言わんばかりに抗議の音を鳴らし続ける。
ぐう。

うん。腹減ってるなあ、俺の胃よ。まだ足りていないんだろう？分かってるさ
ぐう。

だが、それは鳴りすぎだろう。
ぐるううう。

自分の腹の音ではない音が俺の後ろで唸る。さあ、落ち着こう。そして、振り向くんだ。

振り向けば寝惚け眼のナツメが恨めしそうにこちらを見ているではないか。

「……狡い。」

「…は？」

「ご飯……狡い。私はまだ食べていないぞ。」

ああ、あの時にバッチリ起きて見ていたと。取り敢えず俺はナツメの機嫌をこれ以上損ねない為に、冷蔵庫に行つて何か食べる物を探したが……生憎と無かつた。

「……無い、のか？」

「ああ、さっぱり全くだ。明日になればネットで頼んでいたのが届くから明日まで我慢し」

「じゃあ、外に買いに行くぞ。」

…は？今、自宅警備員にとつての禁句が出てきたが。

「下には、コンビニエンスストア、があるのだろう？」

「買いに行け、と？」

「そこまで私は鬼畜ではない。私もついて行つてやる。」

あくまでも傲慢ツンの態度は崩さない。ここまでいくともう清々しい。

だが、ここで折れてしまつては自宅警備員ネットの名折れ。俺は若干強く「俺は外へは出ない。行きたいなら場所を教えるから行つてくれば？」

「…我を通すつもりか。私に対して。…いい度胸だ」

ナツメは口を手で押さえて小さく、くっくくく、と笑つた。そして、いつもの傲慢な微笑みで。

「なら、私が連れ出してやろう。お前の意思とは関係なく、な。」

「何言つて」

ナツメは俺の言葉を無視して。

「迅風」

その言葉が聞こえてからほんの一瞬だけ、目の前が真っ暗になりナツメの声だけが聞こえてくる。

「どうだ？私の魔法は」

目を開ければそこにはよく見知っているコンビニ<7時11時>があつた。

「……は？」

「私が魔法を使ってここまでワープ、転移してきた」

「魔法って……！？ここは現実世界だろ！」

そう反論した俺にナツメは特に悪びれる事もなくさらりと。

「私には現実も何もない。私にはただ、魔法を使えるという事実があるだけだ。」

そんな言葉に俺は言い返す気力もなく、ただ項垂れた。

こうして、俺の自宅警備員生活は三年という短い期間で終わってしまった。

対処2・チートは現実でもチートw(後書き)

はあじめまして！今回はちょっと嗜好を変えてコメディっぽいお話です(´・`・´・`)

ゲームのチートヒロインが暴れますwでも、ちょっとシリアス投入してみたりw

ちなみに。私は最近(ちょっと前かな?)シリーズ15周年を迎えた某シリーズが大好きです。7 5さんのね(´・`・´・`・*)

対処3・ゲームの戦いは現実では結構なハードw

前回までのあらすじ。

ツン…もとい、傲慢^{ソッソ}デレなヒロイン様の現実丸無視の魔法によって俺の自宅警備員生活は呆気なく終わってしまった。…なんだかなあ。

コンビニ<7時11時>である程度のご飯(勿論ナツメの分も込みで)をどっさりと買い込む。

その中にはご飯…なのか食玩やら期間限定のお菓子やらも入っている。財布が悲しい…。

「早く帰るぞ。」

そんな俺の気も知らずに、ナツメは幼い子供のようにニコニコと微笑む。口調は何ら変わっていないが。

「…はあ。はいはい。了解しましたと。」
俺はどっさりと入ったビニル袋を持ち上げると、ナツメが怪訝な顔で辺りを見回している。

「どした…?早く帰るんじゃない?静かに」

ナツメは何時もとは違う声で俺の言葉を遮った。その只ならない雰囲気^{雰囲気}に俺は黙り込むしかなかった。

「…先に帰っている。私の分は取るんじゃないぞ?取ったら、分かっているよな…ん?」

ナツメは俺にそう言うと、足早に帰る方向とは逆の…俺が子供の頃によく行っていた公園へと走っていった。

俺は何かを感じつつも、ナツメのあの雰囲気^{雰囲気}を再び思い出してそのまま帰路を歩き始めた。

集が完全に去った事を確認して、ナツメは公園に続く並木道の木々に語りかける。

「さて、どうした…。私に何か言伝たい事柄でも？」

「いいえ。単に私が興味を持っただけですよ。ゲームでしか存在しない架空の者が生きている様子に。」

並木の木々から響くような声が反響してナツメの耳に届く。

「姿は見せてくれないのか？私はいっけと相手を見ないと話せない性格なのでな。」

ナツメは楽しいかのように微笑んだ。その笑みは酷く美しく、妖艶。『貴方の頼みは断れませんかねえ……。<あの方>からの命令もあります。』

木々が風も吹いていないのにざわざわと靡き始める。空は清々しいほどの黒と青の相まつた見事な景色だが、それとは反対に空気は緊張していた。

「腕試し、というものか？…いいぞ。来いよ。」

靡いていた木々の木の葉が散り、一斉にナツメ目掛けて飛来する。

だが、ナツメはそれに何の興味も示さない。

ただ、先のように妖艶な笑みで。

「…水槍スイオウ」

ナツメに飛来していた木の葉…刃ほどの強度まで強化されていた木の葉が宙でピタリ、と動きを止めた。

ナツメの後ろに仁王立ちするのは水で創られた龍。そしてその頭上で次々に展開されていく同じく水で創られた流星群。木の葉は水に圧倒され、次第に数を減らしていく。

「…ははっ…」

唐突に、声が笑った。その笑いに同調するように木の葉は数を増やして、ナツメに襲いかかってくる。

ナツメはまた水龍に命じて、木の葉を水の流星群で打ち消していく。と、ナツメはある事に気が付いた。何枚かの木の葉がナツメの後ろ、そして、水龍の後ろを通り抜けていく。

先の声が発した唐突の笑い声と、今の木の葉の動きから推測される答えはたった一つ。

(後ろに私が動揺するものがある……っ！！)

ナツメは後ろを向かずに、直ぐ様もう一つの魔法を作動させる。

「っウツツミ影身！」

ナツメの影を借りて創られたもう一人のナツメは本体であるナツメの意思を受けて、直ぐ様後ろへと瞬間で移動するとナツメが動揺するものゝを木の葉の刃から守るためにナツメの力を受けて魔法を発動する。

「ケンカ護花”」

影のナツメとナツメが動揺するものゝに覆いかぶさるように、大きな睡蓮の花が現れる。

「全く。私は帰っている、言っていたはずだが」

ナツメの口調はしっかりと怒っていた。しかし、その表情は驚く程に穏やかに微笑んでいた。

「…ははっ。まあ、ヒロインが戦うのを見るのも悪くないかな。」

その表情に少しは驚きながら、集は言い返した。ナツメは小さく、誰にも聞こえない声で

「馬鹿。」

対処3 ゲームの戦いは現実では結構なハードww(後書き)

∴ 戦闘シーン楽しかったです。多分一番早いペースで戦闘シーンは書いていたと思いますww

対処4・チート戦闘終了のお知らせ。

前回までのあらすじ。

取り敢えず、ゲームの戦闘が現実世界でも起こっている…としか、言えない。

「さて、と。もうこれで終わりか？」

ナツメの勝ち誇る顔が集の脳裏に浮かび上がる。

『……秘欺。』

声の響きが薄れていくと共に、木の葉はただの葉っぱとして地に落ちていく。代わりに、並木から姿を現したのはゆらゆらと陽炎のように揺らいでいる影。しかし、それはしっかりと歩みをナツメに進めていく。

「バックアップシステム、作動。リンク、オールグリーン。」

影の<ナツメ>も後ろの集を護りの花“護花”^{ケンカ}に包み込ませたまま、ナツメの隣りに寄り添うように立ち、言葉を二人で紡ぐ。

それが集にはゲームで一度だけ見たことのある技に見えた。

『…言の葉の紡ぎし、彼方に消えた夢幻よ。ここに。』

二人の間からちらちらと溢れていく光の欠片が次第に大きな鳳凰を創り。

『其方は我と共に、照らす光と在れ。』

形作られていく鳳凰は大きく翼を広げ。舞い踊る光の欠片は桜の花弁を模していく。

『^{フライング}誉の翼』

鳳凰の清く滑らかな咆哮が周囲に優しく響きわたる。

「お前の技…秘欺^{ヒメキ}は、一度に己の分身を大量に発生させる。そして、一体ずつで倒しても直ぐに分身はまた現れる。…私の影身の量産系か？」

桜の花弁となった光は先の木の葉のように鋭い刃のような特性を持

つ。

「でも、一度に倒してしまえば何の問題にもならない。」

……ふあ、さ……ざあああああああ……

光の刃が鳳凰の羽の羽撃きによって、刃となった花卉は次々に影を撃ち抜き数を減らしていく。

だが、その中でナツメは小さな違い……異変に気付いた。

撃ち抜かれていく影の残滓が次第に一つの影に集まっていく事に。

その影は大勢の影よりもかなり後ろの方……まるで指揮官であるかのように立っていた。

(つまり、あれが本体……！)

ナツメは、鳳凰の動きを止めるとその影へと微笑んだ。

「全く出てこないからいつもの影かと思っていたが……そうではなかったな。」

影は口をニヤリ、と歪ませて

『流石は“^{チート}神力”の名を冠するだけあって見破られましたか……いやはや残念。』

影の漆黒の黒が糸のように解けていく。その後、現れたのは白髪を腰にまで靡かせている中性的な顔立ち、体をした、しかし男性。

「久しいな。いや、ゲームでは一回のイベント戦闘でしか会ってはいないかアサギ・リヴェリアス」

『確かに。しかも私は影を通してでしか見ていませんものねえ。ナツメ・イウエ・リスティアート。』

二人は和やかな微笑みで……互いに火花を散らして。

「で。お前が来たということは何かは預かっているのだろうか？でなければ、お前が興味本位でこんな所に来る筈がない。あいつは何て？」

男性……アサギは先の微笑みから一転、表情が一変した。何も感じない無表情へと。

『後、三日。それまでに、全てを断ち切るか……自らく絆を壊してくるか。』

ナツメの顔に亀裂がはしる。だが、アサギはそのまま静かに礼をする。霧のように霧散して消えた。

“護花^{ケンカ}”が消えて集はナツメの所へと向かって、その表情を見て驚いた。

「……あ。どうした？」

ナツメの表情は何かを恐れているような、それでもそれは直ぐにいつもの傲慢な微笑みに戻っていた。

「何を言われたんだ？」

「……知りたいか？」

ナツメは自分の影身^{ワッシミ}を戻すと少し迷ってから。

「ゲームの中に戻る方法がある、と……」

「良かったな！」

集の余りにも嬉しそうな反応にナツメは少し（いやかなり）ムツとした顔で、尚且つ明白に機嫌悪い声で。

「嬉しそうだなあ……。まあ、いい。帰るぞ。」

さっさと歩くナツメに集は慌てて追いかけた。

結論

チートキャラ同士の戦闘は見る分は楽しいが、巻き込まれると結構

…見応えはあるが同時に生命の危険もある。爆風とかばないw

対処5・チートのご機嫌ナツメ。

あれから…現実世界で起こったチート同士の戦いの後から、ナツメの様子がどうもおかしかった。

いつも何処か上の空で、俺を見て溜息をついたり…今までに無かった事が。

「ナツメ。お前、どうしたんだ？あの戦いの後から様子が変わだぞ。」

「ああ。気にするな…。別にお前に何か迷惑をかけるでもなし、これは私個人の問題だから、な」

そう言っただけでまた上の空。こうなってしまうのはこっちの調子も狂ってしまう訳で。

まあ、当然、ゲームも進められないと。

「お前、何悩んでるんだよ。ゲームの中に戻れるんだろ？」

緩々とナツメは首をこっちに向けた。よく見れば目の下にはうつすらと隈が出来ていて。

「…そんなに私が帰る事が嬉しいのか。」

「え？そりゃあ…だっただけでお前の生まれた場所だろ？帰りたいとは思わないのか？」

「…生まれた場所…か。」

ナツメは自嘲するような微笑みを浮かべて、それをまた直ぐに消した。そんな表情を見たことが無いから俺は何か問題でもあるのか、と思っただけ以上は聞かなかった。

…聞くことが出来なかつた。

「さて、少し消える。結構居なくなると思うが…気にするな。」

ナツメは何も考えていないかのような顔で俺にそう言う。

「…もし、私が本当に消えたら、どうする？」

そんな質問が唐突にナツメから聞こえた。俺は直ぐに答える事が出来ず、考えている間にナツメは光となって消えてしまった。多分、あの魔法…シユンブラ迅風を使ったのだらう…僅かなそよ風が部屋を駆けて消

えた。

一陣の風が何処かの病院の何処かの病室にそよ風として舞う。風の後にはナツメが立っていた。

ナツメの視線の先にはベットに横たわり、眠っている少女。触れてしまえば脆く崩れてしまいそうなほど儂く見える少女は辛うじて生きている。聞こえない程の寝息で。

「……このままだったら、良かった……？」

一人、ぽつり、と呟いても応えてくれる人は誰もいない。

「分かんないよね。うん……分かってる。だって」

白すぎる病室に新たな風が舞い踊る。ナツメは少女の頬にそっと触れた。

肌色も見えない程の肌の色。生きているのかも分からない冷たさ。まるで、それは人形。

「……いつまで続くのかな」

“いつまで？私が飽きるまで。”

何処からか響く声はアサギのような中生的な声ではなく、しっかりとした意思を持ったしかし何処か気の抜けた声。

“いやいや。全く予想外だな。君の性格ならさっさと言っていると
思っていたのに。残念”

「お前……いつからここだと分かった？ここが私の……」

“さあ？でも僕にとってはそんな事はどうでもいいんだ。”

“君という玩具おもちゃが中々帰ってこないからさあ、僕、暇人なんだよね”

「知らないな。お前の都合なんて」

“んー。でもここでの君も結構面白いからさあ……。もう少し鑑賞させてもらおうかな？”

「……はっ。私を野放しにしておくとはな。面白い」
声はくすくすと、子供のように笑った。

“後二日。それだけ経ったら僕は君とお君の近くに居る人へとびきの贈り物をしてあげる。”

「……消える。」

“うん。そろそろ戻らなくちゃいけないからねえ。それじゃあねえ”

声は耳に響くままに消える。残されたのはまた静寂。

「……私、は」
咳きに応じてくれる者も、いない。

対処 5・5・ゲーム話 (前書き)

今回は本編ではありません。ちょっととした息抜き用の話ですので
氣楽に見てもらえれば良いと思います。中身はギャグっぽい(?)で
す

対処5・5・ゲーム話

「さて、今回はいつもの話とは違って…ちょっとした息抜きで読んでもらえると私は嬉しい限りだ。」

「あのさ…ナツメ。せめて何をするのか位は喋れって。あー、えと…すみません」

集がペコペコと頭を下げる。

「今回は私がヒロインを務める大人気RPGゲームのあらすじを紹介しようと思っている。」

「大人気って自分で言うか普通…」

「何か言ったか？ん？」

ナツメの極上の微笑みは実はかなり怒っている証拠だったりww

「はあ…さて、それじゃあ紹介しますか。余り文字数ももらっていないからな」

「文字数など関係ない。いざとなったら私が作者に攻撃魔法をぶっぱなして（ry）」

暗転（只今、集が必死にナツメを説得しています。暫しお待ちください。）

「…それでは、あらすじをご覧ください。」

静かな音がいつも世界中に奏でられる世界・オリシア。その奏でられる清らかな音が消えた時、世界に光では決して照らされる事の無い漆黒の闇に包まれていく……。

その時、誰かが願った。否、誰かではない。世界中の皆が願った。

<どうか、この救われぬ漆黒の闇をも照らす優しく、清らかな真光^{ヒカリ}を……。>

その願いが誰に届いたのか、それは誰にも分からない。そして、願いは成就された。

世界の何処か、誰も知らない、世界すらも知らない、近くて遠い場所^{トコロ}で生まれ堕ちた存在を誰からも祝福されず、神にも見離された清らかな真光^{ヒカリ}。

その名は、ナツメ。幻の透き通る桜に誘われた者。

人々の数え切れない程の願いを、己に生まれてから身に封じられていた記憶と過去を背負って。

そして、たどり着く。闇の主へと…自分と同じく誰からも祝福されなかった者へ、ナツメは問う。

「ねえ…」

（こうしてあらずじをしつかりと見るとナツメがナツメっぽくないなあ…。何というか）

「こうしてあらずじをしつかりと見るとナツメがナツメっぽくないなあ…。とか思っていないだろうか？」

「……………（；^ ^）」

「よし、お前。そこから逃げるなよ？」

ナツメが何故かメリケンサック装備で近付いてくる。こうなれば、手段は一つ。

「……………俺、生命は大事にする奴だから！ 〓 〓ゞ（；。°。°）」

集は逃げた！しかしナツメに囲まれた！！

「ふ、ふふふ。逃げられると思うなよ……………？」

暗転

「それでは、また本編で会おう。」

「ま、また本編で頑張りました（ry」
「がくり、と集の頭が落ちた。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5849y/>

RPGヒロインという名のチート野郎。

2011年11月26日01時50分発行